資料館ノート　第 141 号　　令和 2 年 9 月 16 日発行

江戸の漫画を楽しむ③

江戸時代の風刺画

江東区深川江戸資料館

「源頼光公舘土蜘作妖怪図」歌川国芳
天保 14 年（1843）　国立国会図書館 蔵

江戸時代の漫画は、「戯画」「狂画」「鳥羽絵」「ポンチ絵」などと呼ばれ、葛飾北斎や歌川広重、歌川国芳等をはじめとした、多くの浮世絵師によって描かれていました。そこには人々の暮らしや世情等が戯作的表現で描かれ、江戸の人々にも親しまれていました。

本号では、江戸時代末に描かれた時代を風刺した風刺画について、時代背景とその内容をみていきます。今回取り上げる「風刺画」とは、画によって政治や世相、人物等を遠回しに批判する江戸時代の漫画の一つです。

1．戯画から風刺画へ

深川江戸資料館の常設展示室と同時代の天保期（1830 ～ 1844）になると、戯画として発展してきた江戸時代の漫画は大きく転換していきます。そのきっかけは、為政者による綱紀の乱れでした。

この時代は、11 代将軍徳川家斉の奢侈な生活や賄賂政治の横行、天保の大飢饉や百姓一揆などの他にも、天保の改革による寄席や歌舞伎などの娯楽の制限や奢侈禁止令、そして美人絵や役者絵をはじめとする錦絵の制限等々で庶民の不満が蓄積されていました。

幕府を批判した風刺画の一つに、上図の「源頼光公舘土蜘作妖怪図」があります。作者は、江戸における戯画作者としても知られている歌川国芳です。天保の改革中である天保 14 年（1843）に、三枚続の錦絵として出版されました。

上図は、平安時代の武将である源頼光が病の床にあるとき、土蜘蛛の化物に襲われるもこれを斬り退け、配下の四天王（渡辺綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武）に追わせ退治したという土蜘蛛妖怪伝説に取材したものです。

出版されると、この錦絵が既成の頼光と土蜘蛛の絵には見られない要素が含まれているということで、市中において大きな評判を呼びました。

市中の評判では、仮眠中の頼光は夜着に葵の唐花があるので 12 代将軍徳川家慶。夜着に青海波の模様が描かれているのは、水野忠邦にまかれていることを表しています。これは、政治は全て忠邦に任せているので世上のことは何事も知らない、眠っているのは水野の悪政、庶民の怨念を全く知らないということを風刺したというものでした。

四天王は着物の紋や模様から、卜部季武は水野忠邦、渡辺綱は老中の真田信濃守幸貫、坂田金時は老中の堀田備中守正篤、碓井貞光は老中の土井大炊

頭利位（としつら）、あるいは榊原主計頭忠行（ただゆき）であるという風評でした。

また、画面の上半分に描かれている多数の妖怪について、その多くは改革のために摘発や廃業させられた者、処罰を受けた者、あるいは倹約令などで生計が立たなくなった者などの怨念を表すものとの専らの評判だったそうです。「源頼光公舘土蜘作妖怪図」は、その内容から江戸中の評判となり、複数種類の異版が出たといいます。以後、これを端緒に幕府を批判した風刺画があいついで出版されました。

2．安政の大地震

安政２年（1855）10月２日夜四ツ時（午後10時頃）、マグニチュード6.3と推定される直下型の大地震が江戸の町を襲い、多くの被害がもたらされました。この地震の直後から約２か月にわたり、地震鯰を描いたユーモアと風刺に富んだ錦絵仕立ての瓦版が大量に売り出され、庶民がこれを買い求めました。

鯰絵は安政の大地震を契機に流布されはじめ、地震を引き起こすのが地中に潜む大鯰で、これを鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）の鹿島大明神が要石や神剣で押さえているといった昔からの俗信があり、それを地震報道とあわせて鯰を主題として作られた錦絵です。その構図は、鯰が被害を受けた人々に懲らしめられているものや、鹿島大明神などの神々に鯰が謝罪しているものなど、多種多様な鯰絵が出版されています。

上図の鯰絵には、地震を起こした経緯と鯰の弁明、そして神々の対応が文章と絵で描かれています。

ここでは、地震を起こしたと言われている鯰が擬人化され、安政２年の江戸地震（安政の地震）、嘉永６年（1853）の小田原地震、弘化４年（1847）の信州地震（善光寺地震）、文政11年（1828）の越後地震が、瓢箪柄の紋付姿で描かれています。このなかで、地震鯰の弁明によると「近ごろ外国の者達が度々この国にやって来ることをうるさく思っていた。そこで日本の後ろを力任せに揺れ動かし、その弾みで江戸表に出してしまったのが地震という揺れになった」と言っています。鯰の弁明に対して神々は、「要石では甘口なので、柳川の板前へ言って蒲焼、すっぽん煮にする」と脅しています。この脅しに対して地震鯰たちは神々へ「今後はもう二度と動きません」という証文を書いたというものです。

3．幕末の世情

慶応年間（1865～1868）は、大政奉還や幕府の

「鯰絵」江東区教育委員会 蔵

瓦解、新政府の樹立などで幕府方と新政府方との間で熾烈な戦いが繰り広げられました。この間の政治情勢を題材にした風刺画が多く出版され、その中でも、とりわけこどもが二手に分かれて競う遊びになぞらえて描かれたものが少なくありません。

これらの風刺画には衣服の紋様等に家紋や産物などを描き、その人物が何藩であるかが分かるように工夫されていました。例えば、薩摩藩は絣布（かすりぬの）（名産）、丸に十文字、くつわ（いずれも家紋）など。長州藩は萩の花や葉、一文字三ツ星（家紋）など。土佐藩は三柏紋（家紋）、鰹節（名産）など。徳川慶喜は一の字つなぎ。桑名藩は蛤（名産）等々で描かれ、何が描かれているのか、絵を見た人にとって特定できるように描かれていました。

江戸時代終わり頃になると、戯画として発展した漫画はその世情等を反映し、時代を風刺した「風刺画」として多く描かれるようになりました。そのなかには、幕府や幕府の改革に対する内容、安政の地震等の災害や政治情勢等を描きながらも風刺やユーモアに富んだ内容で描かれ、江戸の人々に親しまれていたといえます。

【主な参考文献】
南和男『江戸の風刺画』（吉川弘文館 /1997）
南和男『幕末維新の風刺画』（吉川弘文館 /1999）
『鯰絵－安政江戸大地震後の世相を伝える錦絵－』博物館ブックレット第３集（埼玉県立歴史と民俗の博物館 /2016）